

令和2年度 経済建設委員会行政視察報告

●参加委員

委員長 田中 勇

副委員長 野島 義正

委員 藏成 幹也、村上 満典、宮川 英之、氏永 東光、尾上 頼子、部谷 翔大

1 視察年月日

令和2年11月17日（火）

2 視察先及び視察事項

(1) 新山口駅北口駅前広場の設計・デザインからみる公共施設整備におけるユニバーサルデザインについて

・山口市盲人福祉協会との意見交換（現地調査）

(2) 山口市産業交流拠点施設について

3 視察概要

(1) 新山口駅北口駅前広場の設計・デザインからみる公共施設整備におけるユニバーサルデザインについて

・山口市盲人福祉協会との意見交換（現地調査）

（視察目的）

令和2年6月定例会の本会議及び経済建設委員会一般質問において取り上げられた新山口駅北口駅前広場の整備における視覚障がい者への配慮について確認するため、当事者団体（全盲、弱視、事務局の3名）の協力により現地にて直接当事者の御意見をお伺いし調査したものです。

（概要）

新山口駅北口駅前広場周辺の整備後、実際に利用された当事者において、移動に危険や不安、不便さを感じる点について整理され、市に対しても要望を伝えられています。議会の本会議及び本委員会の一般質問でも整備にあたっての配慮不足について取り上げられたことから、施設及び市バリアフリー基本構想を所管する都市整備部を所管する委員会として、現地にて当事者の説明と御意見を伺いました。

調査にあたっては、今後の公共施設整備におけるユニバーサルデザインの実現のために

は当時者の意見をどのように聴取し、取り入れていくべきかの視点も含め考察しました。

また、当事者の感覚を体感するため、委員が全盲を再現するアイマスクと白杖（盲人安全つえ）を持ち、それを支え音声で案内する役（委員）を設定し調査に臨みました。

なお、視覚障がいをお持ちの方といっても全盲と弱視の方、弱視の方でも見え方に個人差があり、移動にあたって頼りとされている設備に差があることを理解する必要があります。

●視覚障害者点字誘導ブロック（以下、点字誘導ブロック）について

【全盲の方（一例）】

白杖（盲人安全つえ）を使用し、地面に敷設された点字誘導ブロック（誘導を目的とした線状ブロック、注意喚起を目的とした点状誘導ブロック等）の突起を確認されながら移動されます。

【弱視の方（一例）】

点字誘導ブロックの突起のみではなく、突起周辺も含めた色を視認し移動される方もおられます。

例えば、一般的に黄色の正方形の点字誘導ブロックが多くありますが、黒い（輝度が低い）アスファルトの地面に黄色（輝度が高い）の点字誘導ブロックを敷けば輝度比（明るさの差）があり視認しやすく、ルートがわかりやすいですが、同じ黄色の点字誘導ブロックでも明るい色（輝度の高い色）の地面に敷いた場合は視認しにくくなります。

単純に、点字誘導ブロックは黄色でなければならないということではなく、設計・デザインにあたっては様々な点に考慮する必要があります。

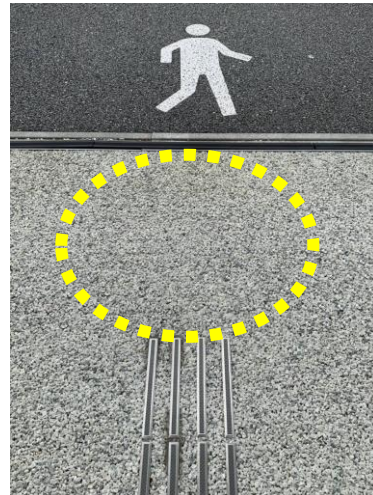
以上を踏まえた上で、当事者団体からの要望・御意見及び調査結果について以下のとおりまとめます。

① 点字ブロックの改善

新山口駅北口駅前広場に施工されたものは、グレーの地面に対しシルバー色の突起物のみによるもので、白杖（盲人安全つえ）と足の感覚を頼りに歩かれる全盲の方にとっては効果がありますが、弱視の方にとっては点字ブロックと地面との色（輝度）の差がないため視認しにくく、仮に突起物の色のみを変更しても突起物のみのサイズでは視認しづらい状況です。



床面と誘導ブロックの色（輝度）の差がないため視認しづらい



注意喚起を目的とした点状誘導ブロックが見えない

② 北口駅前広場から橋上駅舎及び南北自由通路に通じる階段手すりへの点字表示

在来線側の階段手すりには点字表示がありますが、北口正面のエスカレーターと並置の階段手すりには点字表示が未設置です。



手すりに設置された点字による案内



点字による案内が未設置の手すり

③ 北口駅前広場 2 階にある支柱ならびにエスカレーターや階段を囲むガラス扉に併設している手すりへの対応

手すりに伝って歩くと支柱等に衝突する危険性のある箇所が多数存在します。2 階の支柱が斜めに設置されている箇所は、手すりを伝いながら人が通れる幅がなく、それを回避したとしても柱と柱の間隔が狭く通りづらくなっています。また、支柱が手すりに接しているものや、行き着く先がガラス壁で手すりが途切れている箇所もあります。



手すりを伝って通ることができない箇所



左写真の箇所を回避しても通りづらい



手すり支柱が接している箇所

④ 産業交流拠点施設と北口駅前広場・北口交通広場のアクセシビリティ

2階のウッドデッキ部分には点字誘導ブロックがありません。

木と木の隙間があるため杖が挟まってしまう恐れがあります。

2階のウッドデッキの両サイドには手すりがあるものの、植栽とベンチで途切れて次の手すりは反対側の壁面にあり、そこまで伝うものなく移動する必要があります。

植栽部分で手すりが直角に曲げられている箇所等、危険を伴う箇所には注意喚起を目的とした点状誘導ブロックの設置が好ましいとのことでした。



手すりを伝って歩いていると（下写真に続く）



植栽に沿って手すりが急に90度曲がったあと（下写真に続く）



突然手すりがなくなる



植栽の先にはベンチが設置され手すりはない

⑤ 設計施工前の当事者との事前協議

北口駅前広場から橋上駅舎にあがる階段部分の手すりを伝って歩くと支柱に衝突する作りになっていましたが、支柱を回避するよう手すりが改修されていました。

迅速な対応に非常に感謝されている一方、支柱回避の角度が急であることから、踊り場からの一段目の階段に躓いてしまいます。階段の上り下りも考慮し、もう少し手前から回避してあればよかったとの御意見がありました。

改修の設計の段階から当事者と現地で協議をしていれば、よりよい改修がなされていたであろう点は今後の参考となります。



支柱回避のため手すりを改修された箇所



踊り場と階段の段差に躓いてしまう



階段の下りはじめ、上り下り途中に急角度で横移動する必要があるので危険

(調査結果)

視覚障がいをお持ちの方の当事者目線での御意見を伺いましたが、公共施設に求められるユニバーサルデザインの視点からは反省すべき点が多くありました。

なお、このたび確認した事項はあくまでも視覚障がい者の視点からの課題であり、ユニバーサルデザインの視点では、あらゆる年代、あらゆる障がいをお持ちの方にとって使いやすい空間を整備する必要があります。

一度建設してしまうと容易に変更できないことから、設計段階においてユニバーサルデザインを前提条件とし、必要に応じて当事者の意見を聴取する手法や設計に反映させる手段について検討する必要があります。

隣地では産業交流拠点施設建設中であり、多くの方が利用する当該施設へのアクセス性については改善する必要があるとともに、今後整備する公共施設におけるユニバーサルデザインの実現のための方策についても追求し、市が部局横断的に積極的に取り組むとともに数年のスパンで人事異動が伴う市職員による管理監督機能、ノウハウの蓄積等についても検討していく必要があります。

(主な所感)

- ・現地にて直接、山口市盲人福祉協会会長をはじめ3名の丁寧な説明と要望・御意見をお伺いし、まさにそのとおりであると痛感した。
- ・山口市盲人福祉協会からの要望事項について、委員会として執行部の見解を求めたい。
- ・供用開始直後ともいえる施設において、ユニバーサルデザインという視点から多くの問題点を御指摘いただいた。その多くは注意さえしておけば設計段階で抽出・改善できたはずである。公共事業として取り組んでいる以上、「初めに言ってくれば」との言い訳は行政側にはできない。当事者等に意見を聞く機会を持つことは当然であるが、当事者の方々に「自分たちが意見を言わずとも大丈夫」と思っていただけのような行政であるべきと強く感じた。
- ・調査に御協力いただいた市盲人福祉協会の皆さんが、議員（委員会）が現地に赴き当事者の御意見をお伺いすることと、市が迅速に手すりの改修に取り組まれたことに深く感謝の意を表され、議会と市の行動が当事者に与える影響の大きさを実感した。
- ・供用開始段階から、北口交通広場2階のV字型支柱や階段の横に設置されている支柱等、視覚障がい者の方のみならず様々な世代の方の通行において衝突等が危惧される課題が存在すると認識していたが、今回の視察における市盲人福祉協会との意見交換においてそれらを改めて認識するに至った。
- ・今後の課題としては同会から提出された要望書をもとに駅前広場とその周辺の今後の在り方について検討すると同時に、喫緊の課題としては来年4月供用開始予定の産業交流拠

- 点施設へのアクセスについて如何に対応するか、より良い方向性が求められると考える。
- ・ユニバーサルデザインや障がい者への配慮を進める上においても、関係者等の御意見をしっかりと踏まえて、整備を進めていくことの重要性を感じた。
 - ・設計と施工は分離すべきである。市と市民の意見を設計の段階でバリアフリー等十分組み入れるシステムとすべきである。
 - ・デザイン性重視で、利用者の立場に立った利便性や安全性という観点が希薄である。市盲人福祉協会の方が言われるように、事前にいろんな立場の方々に御意見を聴くことが大事である。設計者は、いくつも公共施設を手掛けられているはずなのに、問題点がいくつも出てくるということはどういうことなのだろうか。発注者である市が求めたもの、チェック体制はどうであったのか。こうした不具合があることは設計者にも伝えるべきと考える。
 - ・手すりの材質としては、ずっと手で触れて移動するものなので、もう少し表面が滑らかなもの、冷たい質感ではないものがありがたいといった御意見もあった。誰がどういった使い方をされるためのものか、どの施設まで安全に誘導するためのものか、快適に使えるかといった様々な視点で設計・施工する必要性を再認識した。
 - ・実際に自身で盲人の体験をしたが、介助人が傍にいて危険を回避してくれるとわかっているにもかかわらず、怖くて腰が引けた。健常者はなかなか障がい者の気持ちが分からない。それ故、常に自分は健常者で多数派にいるという事を忘れず、少数者の立場に立って物事を考えるべきであり、政治家や行政職員は絶対にその心を失ってはならない。
 - ・山口県の陸の玄関口であり交通結節点である新山口駅とその周辺の移動の安全や、多くの利用者が見込まれる産業交流拠点施設へのアクセス性について、手すりが繋がっていない等の様々な問題を解消し、安心して移動できる環境を整える必要がある。現在建設中である拠点施設へ繋がるペDESTリアンデッキ等については、見直すことができるぎりぎりのタイミングではないか。供用開始直後に指摘がないよう再考されたい。
 - ・公共施設でありながら、山口県福祉のまちづくり条例に定められた構造等基準を満たしているのか疑問である（経路における構造について、点字誘導ブロックは、床面との色の明度、色相又は彩度の差が大きいことにより容易に識別できることと明記されている）。行政体制を改めるべきと考える。

(2) 山口市産業交流拠点施設について

(調査目的)

山口市産業交流拠点施設の建設の状況を確認し、令和3年4月のオープンに向けた事業の進捗状況や今後の展開、課題等について調査したものです。

(概要)

山口市産業交流拠点施設の整備の進捗率は、11月末時点で73%であるとのことで、新型コロナウイルス感染症による工期の遅れ等もなく順調に進んでいます。施設の外観や全体像について確認できる段階であり、担当者からの説明により、施設完成後の計画的な運用や施設のコンセプトに基づき、業者とも連携を密にしながら整備が進められていることが確認できました。



新山口駅側（先に調査した広場）からペデストリアンデッキで繋がる



多目的ホールの平土間部分で可動床や舞台の説明を受ける



テナント入居部分と周辺（立体駐車場等）の整備状況を確認

（主な所感）

- ・仕上がりを見ないと分からない点は多々あったが、ホールをはじめ、新山口駅との回遊性が重要であると感じた。躍動感と期待で胸が高鳴った。
- ・整備途中ということもあり、大まかなイメージを抱く程度であったが、今後の進捗に合わせて、ユニバーサルデザインの確認など適宜行うべきと感じた。完成直後に手直しが必要であるとか、多くの苦情が寄せられることの無いよう鋭意取り組んでいただきたい。
- ・最新の設備を備え様々な利用の可能性のある施設であることから、障がいをお持ちの方なども含めてあらゆる利用目的で施設を訪れる方を想定し、駅から施設までの動線を含め、施設全体のユニバーサルデザインが求められる。設計段階でどの程度実現するかたちとなっているか、同日の駅前北口広場の山口市盲人福祉協会との意見交換において、拠点施設と接続するペDESTリアンデッキや駅前広場周辺の整備状況でみえた課題と合わせて取り組んでいく必要があると考える。
- ・多目的ホールにおいては、2000人規模での可変型ホールを実際に見ることにより、供用開始後の様々な利活用について期待値は確実に上がると認識できた。
- ・現在、コロナ禍の状況下という制約があり、開館に向けたイベントは産業交流スペースのみに限られているが、地元をはじめとする市民へ供用開始に向けた情報提供を様々な手法を駆使し、取り組んでいただきたい。
- ・施設の指定管理者である森ビル都市企画株式会社や株式会社コンベンションリンケージ、また産業交流スペースの指定管理者である株式会社ツクリエなどと協議しながら、今後これら施設及び機能のソフト展開や運営を考えていく必要がある。
- ・この施設を核とする周辺地区への経済波及効果や、今後の整備方針についても検証し、民間投資を呼び込むことが重要である。

- ・多目的ホールにおいて大規模イベントが開催された折には、現時点でも飲食施設や宿泊施設の不足が課題となっており、山口都市核にある県下最大の宿泊基地、湯田温泉や中心商店街との連携も不可欠である。
- ・早急に、多目的ホールや会議室におけるケータリング（仕出し）の受注可能な事業者を市内で選定していく必要がある。整備段階では、施設の稼働状況やニーズが見えない状況であり、事業者への情報提供、出資に対する支援や利益の担保など市が取り組むべき課題がみえる。
- ・形が出来上がってきて、イメージしやすい段階に入った。来場者が満足するような、地域での受け皿作りが早急に求められる課題である。
- ・駅のホームから見て、低層・分散の建築物で一等地の市民財産の方途として容積率40%の未活用はもったいないと再認識した。
- ・整備中の立体駐車場から産業交流拠点施設、駅への誘導にはルーフ（屋根）が必要である。ペDESTリアンデッキの整備も検討されたい。
- ・山口県の玄関口であり農林水産物の販売所が必要だと再認識した。